幼児教育のことを考える

周郷　博

幼児教育のことを考えるという、その「こと」とはいったい何であろうか？　このことについて、前から考えていた、日本語の「こと」と「もの」（合わせて「ものごと」ということばで完結する一種の世界像の原型を日本人は持っていた、とみる）ということばを手がかりに、ひとつ風変わりなみかたを述べてみようと思います。きょうの題が「幼児教育のことを考える」となっているので、思いついたのも事実ですが、これは、実は前から考えていたことなのです。

私がどういうことを考えているかというと、この「こと」と「もの」とが日本語でどう違っており、どういう関係をもって使い分けられてきたか、という問題です。

日本のことばに「ものごと（物事）」というのがありますが、この「ものごと」ということばは、人間がかかわり合っている現象、あるいはあると想像される現象のすべてをいいあらわしているようです。つまり日本人の「世界」は、ものとことで、できあがっているように思われます。

このものとことは、どう使い分けられてきているだろうか？

この「物（もの）」と「事（こと）」の関係について、夏目漱石が松山中学校にいた頃に書いたものが残っている。「物」は客観で「事」は主観が関与している、といったものでした。

ものを簡単にいいますと、「もの心がついた」「もの思いにふける」「ものがなしい」「ものおじしない」……「もののけ」ということばもあって、また「もののあわれ」ということばもあった。すっぱりと割り切れない、説明のつかない「何か」を、このものは指示している。そういう割り切って説明しつくせない「何か」を「ものする」というときには、そのとらえにくい「何か」

を詩や歌につくる、――創造する、形象化することになる。また、それは物部氏の「物」（もの）でもあって、あるのかないのかわからない死後の世界にかかわるしごとでした。そういうものの世界がいっぱいにあります。

ことというのは、「ことわり」「ことあげ」……個人のことばの論理で割り切れる世界で、昔の武士などが最期に「我がこと終われり」という場合も、これとは別のものではないようですが、「ひめごと」「かくしごと」のように小さい個人の中へ取りこんだことではなく、十分「しごと」に張った責任を取る形です。

「我がこと終われり」というのは、私の責任はこれ以上果たせないという、ぎりぎりの状態を語っている。つまりこのことは、生きている人間が責任をとりうる範囲の全部のことです。というのも、ことと関係があるでしょう。「こと切れた」とは死ぬことでした。

日本人の世界は、大きく広がっている、つかまえがたいもの、かなしいもの、うつくしいもの（出合い）そういう「もの」と、有限な生の理知やことばで割り切れる、つかまえられる「こと」との緊張関係の中に生を感じとっていたように思われます。

……そこで、どうもうまくいえないのですが、「幼児教育のことを考える」「教育のことを考える」という題目が最近目立っていますが、それは幼児教育について、教育について、人間の責任をはっきりさせたい、さらにいえばどれだけの責任を果たしうるか……そういう問題を考えようとしているのでしょう。しかし、幼児教育に限らず、教育というつかまえがたいもの全体と、その「こと」はどうかかわっているだろうか。そういうものは、人間の責任の範囲内で全部すっかり解決はできない……人力の及ばないものもあります。だから私がここで、いってみようとしていることは、結論ふうにいってしまえば、「幼児教育のことを考える」などといいながら、その幼児教育を、小さなこと――割り切った「ことば」「知識」「処方箋」みたいなもの――にしてしまってはいけない、ということになるでしょう。

こと（生きていけること existence, できごと event,―詩、歴史）は、みなもの（matter, nature, the univers）の“issue”（そこから生まれでてきたもの）でしょう。ことば（logos）は、それと関係を持っているでしょう。ことば―ことの葉は、その恵まれた“issue”で、人間自体をも含む広大なものの世界の機微をつかまえる。こと―ことばは、そういうものの世界との関係を切られたときには死んでしまう。

ことともものを自然科学の進歩について考えてみることもできる

でしょう。

今まで分からなかったもの（自然や物や生体）が、ことの世界にとらえられる、入ってくる。しかし永久にわからないものは、なお残るでしょう。アインシュタインの質量とエネルギーの等価を表わす式、あれはことばですが、普通の人が考え及ばない広大な宇宙の構造を通した、ひとつのものの世界をつかんでいることばでしょう。

こうして考えてみると、結論を急ぐことになるが、人間が大きくなれば、ことも大きくなる、人間が小さくなると、ことも小さくなってしまう、といえるのではないだろうか。こととことばだけに、消極的に小さくよりかかっていて、ものの世界に感性・行動・理性を働かせて関係をつける気力を失うと、幼児教育というものは生命のない、小さな我がことに引き込まれた、ことば操作の死んだものになってしまうのではないだろうか。

本当によく考えぬいて、つかまれたことばは、いろいろな人に受け継がれて、だんだんに磨かれ、ものの世界のある部分—わからないもの—を、もっとつかむようになり、生命の通ったものになるだろう。

しかし教育の世界では、ことばが流行で終わっている……イギリスのような国でさえ、教育界では一時の流行語でお上手に通り、すこしもことばが生産的でない、といわれる。ですから、幼児教育を教育界で流行していることばだけで考えていては、理解できない。もっと微妙な宗教的なもの—説明のつかないもの—が入ってこなければいけないのではないだろうか。

子どもというもの、人間というものを、全部すっかり説明することはできない。説明のつかないものを含めて考えないと、子どもは機械的に扱われ、個性のない製品と同じように作られてしまう、天性を破壊してしまうことになってしまわないだろうか。メルロ・ポンチーの現象学は、こういう現代人の限界状況を問題にしている。

一人の子の成長は、幼児教育のことであると同時に、作為以上のものでもある。

幼児教育というもの—このものは、ひろがりをもっている……いろいろな人間の活動と関係があり、幼児教育だけを切り取って理解することは理解を「箱入り」にすることではないだろうか。子どもは、他の人間の活動全部と関係し、時間の流れの中で、今、ここにいて、しばらくいるだけでしょう。

死後の世界も、ものの世界である。

人間の活動—歴史のなかに人間が創っている社会—があり、大自然もあり、宇宙もある。

ここに生きている子どもは、過去・ずっと長い間の生命の発展・進化の中で生まれた。

人間の歴史は地球の進化の中で創られた。今、我々が人間として責任を持ちうる範囲のことを、そういう大きなものの中で考えると、そのこと—人間のこと—は非常に大きくなる。ことの世界は、大きなものの世界といっしょにある——まだわからないものと……

「ものの世界がわかる」ということは、人間だけがやっていることでしょう。人間だけが思い出を持ち、その思い出よりもっと過去に奥深く根を張って、我々は今、ここにいる。そして見も知らない、わからない未来へ行くことを知っている。

幼児教育のことを考えると、そのことは、もっと大きな世界の中にあり、宗教的なもの（宗教とは違う）が、そこへ入ってくることになるでしょう。

絶えず、ほんとうのもの—真理—を追求する努力がなければならないでしょう。自分の目で確かめ、感覚・同じ人間として生きる深い悲しみ・愛・でとらえた真理を持って、幼児教育を考えねばならぬでしょう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

二週間ほどまえに、コロンビア大学の友人が、ルーサー・キング牧師についての一冊の本、「わたしには夢がある」（I have a Dream）というのを送ってきた。

彼が非暴力・中立の立場に立ったこと、それが、危険であり、また、危険な道に立つということが、彼としての decent な生き方だと確信していた。

そのなかに、

Every man should have something he would die for.

（人は誰でも、そのために死をもいとわない何ものかを持たなければいけない）という彼のことばがでていた。日本は、この何ものか（something）を持っていないのではないか。この何ものか（something）を見つけ出さなければ、教育はふ抜けたものになってしまわないだろうか。

我々は、現在、大きな心を、そして何ものか（something）を

持っていないように思われる。つまり、日本人が果たすべき世界史的使命を持っていない。ものとことの大きな緊張関係ダイナミズムがそのためには、いるのだろう。

人間の心・魂が大きくなれば、小さなことの世界だけでなく、人類がどこから来て、どこへ行くのか、という大きな問題・そして死といっしょに生があるということを考えるようになる。人間の魂は大きくなければならない。これは、現代人すべての課題でしょう。そうすれば、ことばも人間を通して、生きた意味を持ってくるでしょう。

この時代に教育の問題を考えるときは、非常に大きな舞台に、それを置き直して考えるより方法がない。今日以後の教育の主軸をなす価値(axiology)は、人間の問題——生命と人類の進化——そういったものの中になるのでしょう。過去を受け継ぎ、人間はどこへ行くか……そのことと関係を切った教育は、マイホーム相手の商売以上にはならない。

人間は人間になろうとしていること——ことが、すべての前提になるでしょう。キング師のいうような何ものか(something)をもった人だけが、子どもたちを、何ものか(something)として扱うでしょう。何ものか(something)として扱われた子どもだけが、成長して、何ものか(something)を持った人間になるのではないでしょうか。

ことばがわかる、ということは、わかった人の肉体を通して、ことばが別の新しい行動を生起させ、新しい意味をもってこなければならない。今日は、ヘッド(head)とハート(heart)が結びついていない。ハート(heart)は、ものの世界を感じる力を持っている。トインビーの「変化と慣習」(Change and Habit)は、人類史の問題としてこのことを問題としています。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「光る砂漠」を書いた矢沢宰君について、話したいと思う。彼の遺稿を編集して、最近私が出版したからです。

彼は一昨年、二十一歳で亡くなってしまったのですが、その彼が十三歳の時から書いた詩と日記です。

八歳で腎結核と診断され、一つの腎臓を切りとってしまい、十三歳の時に残った腎臓も発病して病院に入院し、それ以来、十六歳になって二十メートル歩けるまで、ずっと寝たきりでした。

最初の話と、どう結びつくか、を考えてほしいのです。

死の中に入りこんでいた彼が、十三歳の頃から生きようという決心をした。

「何故生きようとしたか」そこが重要だと思います。

……五年ほど前の秋、わたしが病気であることがわかったとき、もう死んでよいとさえ思っていた。再発だから今さらどうしようもないと考えたのである。だからだれにも、病気のことを知らせなかった。病気が悪化し、激痛と出血が続いた。今から考えるとあの頃は全く単純な考えであった。あの頃の私の頭の中には死んだらいいということしかなかった。十三歳の秋であった。……

我々は、死んでもいい状態で、死にもしないし、生きもしないでいるのかもしれない。そういう反省にさそわれないだろうか。

……翌年の三月ついに動けなくなってしまった。身も心も極度に衰弱していた。生きることも半ばあきらめていたので倒れても平気であったが、そばに母が涙を流しながら座っているのを見ると、急に悲しさがこみ上げてきたのを覚えている。……

生きるということは、悲しみが分かることだ。生きるということは、彼の状態では、苦しみを負う決心をしたことだ。そう思われます。先生も教えてばかりいる必要はない。この子のために悲しんだ方がよいのではないか……と。

……しかし入院してからのわたしの気持は、まったく別のものになってしまった。助からないと思う気持は変わらないとしても、毎日の治療と看護にかすかに安心感を抱くようになった。考えるとあの頃の看護婦さんにはずいぶんお世話になったものだ。感謝の気持で一杯である。看護の点においてはいうまでもなく、毎日の会話や生活の中にもわたしの気持を理解しやわらげてくださった。歌をうたってもらったこともあった。トランプ遊びもしてもらった。庭の四つ葉のクローバーをつんでもらい「運」をうらなったりもした。動けないから鏡で外をのぞいていたのだが、その時鏡にうつった看護婦さんの笑顔は今でも忘れることができない。何と親切な人々なのだろう。身動き一つできないわたしにこんなに親切にしてくださるとは！ そしてあの笑顔と！ そのときはじめて、人間の尊さ、偉さがはっきりわかったような気がした。……

この看護婦さんが生きる決心をさせたのです！ たしかに決定的に……教師はどこにいるのかわからないものだということを考えさせます。

動けない人でも鏡と目だけで、いろいろなことを見ている。

ものの世界とことの世界・つまり死と生の境目にいて、生の意

味をはっきりとらえようとした。

死との対決の中で、生がいきいきとする。

本当に

本当になって
話をきいてくれると
そのうれしさに
目のまわりがあつくなる
でもその人に
はずかしいから
ぐっとこらえると
ひざが
ガクガクして
体がふっと浮きそうだ

一瞬、一瞬の生というものを大事に生きる。そういう生活が始まったのです。

本当になって話をきくことは、今の日本にはすくない。たとえ話をしても、きいてあげないのではないか。

ききょう

おまえは
本当に健康そうだね
つぼみは
ちょっとさわれば
はじけそうだね

（十四歳）

生きようと決心した時から生命の満ちあふれたききょうの花を想い、詩を書いた。

詩を書くことにより、生きる力を増そうとした。

肉体的にだめになっている彼が、ことばによって生きたのです。これは誇張ではないと思われる。

一本のすじ雲

一本のすじ雲
このはてしない青空に
何かと何かを結ぶように
夕日で銀色にそまる
僕は好きだこの一本のすじ雲が

（十四歳）

自然は生命であり、その感動を詩にすることによって生きた。

すじ雲

あそこの空に
長い二本の
すじ雲をひこう。
すじ雲には
桃色の夕焼けが光る。
むこうの山の上の
入道雲には、
僕の大好きな
看護婦さんを坐らせよう。
僕は
カンバラの
青い平野に
大の字に寝ていつまでも
これらを
見ていよう。

（十五歳）

人類を受け継いでいるものが、幼いものでここにいる、ことを考えねばいけないでしょう。

現代の日本はことばが安売りされている。
ことばが魂まで響いてこない。
幼児に、やる気、人間として生きたい、という気持をおこさせるのを誰がするのか。

今、人間は一つの羽根（翼）だけで飛べると思っている動物に近い、とH・リードは、じつに巧みなことばでいった。

教育の与えてくれるものは、一つの羽根—知識—にすぎない。
もう一つの羽根、つまり「自分自身の魂を発見する」という、羽根……が必要でしょう。二つの翼でしか飛翔はできない。
教育は外からだけ、与えられるものではないでしょう。

人間の魂が大きくならなければ、ものの世界まで考えることはできない。魂が小さい時は、ことの世界に生き、生きた喜びも味わえないで終わるでしょう。

（文中引用は、矢沢宰「光る砂漠—第一に死が——」南北社・昭43より。出版社の許可によるものである）

（幼稚園教育実際指導研究会での講演より）